

幼児期および児童期における学習意欲の形成 — 親の関わりを中心に —

櫻井 茂男

筑波大学 教授

はじめに

子どもの学習意欲をどのように形成するかが重要な教育課題になっている。そこで本稿では、学習意欲の中心に位置する「自ら学ぶ意欲」を取り上げ、まず自ら学ぶ意欲がどのようなプロセスで展開されるのかを筆者（櫻井、2009、2010）が提唱している「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」に沿って説明し、つぎにこのモデルに基づき、①幼児期と②児童期（小学校時代）における子どもの自ら学ぶ意欲をどのように育てたらよいのか、について発達的な特徴も考慮しながら、親の関わりを中心に提案したいと思う。

自ら学ぶ意欲のプロセスモデルについて

「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」の概略は図1に示されている。このモデルではまず、情報（おもに教育）と知的好奇心、有能さへの欲求（自律性の欲求を含む）、向社会的欲求といった三種類の欲求から、自ら学ぶ意欲（図1の「動機」）が形成されると仮定する。

そして自ら学ぶ意欲は学習行動を生起させ、安心して学べる環境によって学習行動が成功裏に終わると、学習行動の結果として「おもしろい・楽しい」といった感情、有能感（自律感を含む）、充実感が発生すると考える。

万が一成功裏に終わらない（失敗した）場合

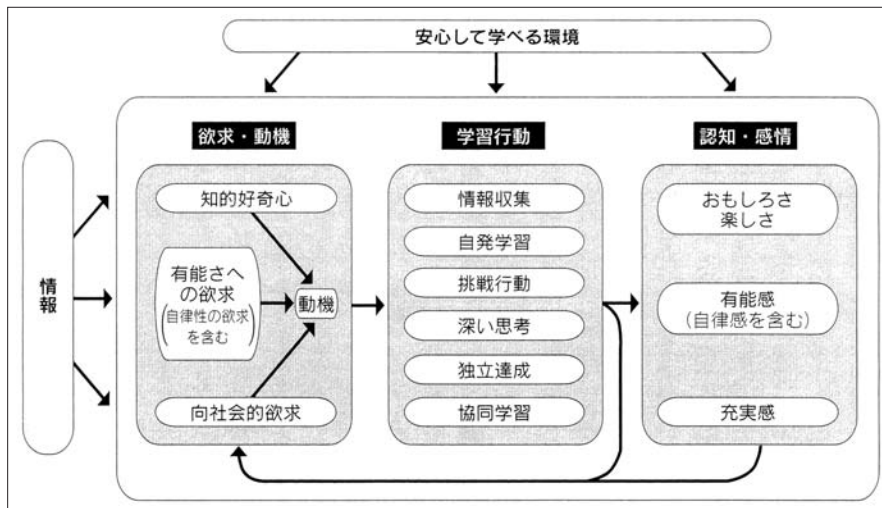


図1 自ら学ぶ意欲のプロセスモデル（櫻井、2010）

には、失敗したことが欲求にフィードバックされ、動機が修正されて新たな学習行動が展開される。成功した場合には、「おもしろい・楽しい」といった感情、有能感、充実感が欲求にフィードバックされ、新たな自ら学ぶ意欲（動機）が形成され、モデルは永遠に働き続けるものと仮定する。モデルの詳細については、拙著（櫻井、2009）を参照されたい。ここではモデルの各要因について、もう少し説明をしたいと思う。

「安心して学べる環境」とは、子どもが安心して学べる学校環境や家庭環境のことである。この環境には、安全に学べる物理的環境と安心して学べる対人的環境が含まれる。わが国で重要なのは后者で、子どもにとって自分をサポートしてくれる友達や教師や親などがそばにいる環境である。自ら学ぶ意欲によって、図1のプロセスがスムーズに展開するには、安心して学べる環境の確保がもっとも重要である。

「情報」とは、見たこと、聞いたこと、思い出したこと、考えたことなどであるが、子どもの場合には、教育による情報が中心となる。具体的に言えば、学校での授業（学習）、家庭での学習、教師や親の指導や友だちの対応（褒めること、激励することなど）のことである。安心して学べる環境と情報は、自ら学ぶ意欲が発現するプロセスに影響する重要な要因と考えられる。

自ら学ぶ意欲が発現するプロセスには、「欲求・動機」レベルの要因、「学習行動」レベルの要因、「認知・感情」レベルの要因がある。これらはほぼこの順序で当該プロセスを構成し、おもに認知・感情レベルの要因が欲求・動機レベルの要因にフィードバックされ

ることで、このプロセスは永遠に動き続けることになる。

欲求・動機レベルの要因には、「知的好奇心」「有能さへの欲求（自律性の欲求を含む）」「向社会的欲求」と、おもにそれらと情報によって形成される「動機」がある。知的好奇心とは未知のことや珍しいことに興味関心を持ち、それらを探究したいという欲求である。有能さへの欲求は、より有能になりたいという欲求であるが、高次の欲求になると自律性の欲求（自己決定してやっていきたいという欲求）が加味される。向社会的欲求は、人や社会のためになりたいという欲求であり、思いやりの気持ちと関連している。こうした欲求や情報などから刺激を受けて、子どもは具体的に「～をしたい」という動機を形成する。この動機が「自ら学ぶ意欲」である。未知のことを調べてわかるようになりたい、より有能になりたい、人や社会のためになりたい、といったような漠然とした欲求が、情報（教育）などの作用を受けて、自ら学ぶ意欲という動機に結実する。例えば、算数への純粋な好奇心、もっとわかるようになりたいという有能さへの欲求、さらには算数が不得意な友達にわかりやすく教えてあげたいという向社会的欲求から、教師が出題した難しい算数の問題をうまく解いてみたい、というような自ら学ぶ意欲が形成されるのである。

さて自ら学ぶ意欲は、学習行動レベルの要因に影響し活発な学習を展開させる。図1には6つの例が挙げられている。「情報収集」「自発学習」「挑戦行動（いまよりも少し難しい問題に挑戦すること）」「深い思考（問題の解決法を複数考えたり、よりよい解決法を考えたり、仮説や教えを自分なりに吟味し

たりすること)」「独立達成(できるだけ自分ひとりの力で問題を解決すること)」そして「協同学習(友だちと協力して問題を解決すること)」である。独立達成とは、自分の潜在的な能力を開花させるために、できるだけ一人で頑張るという学習行動であるが、どうしても自分一人の力で解決できないときは、教師や友達や親にサポートをしてもらうことになる。安心して学べる環境はそのためにあるが、安易にサポートを求めることは自らの潜在的な力を開花させることにはならない。そのためそのような場合には、サポートをする側もさらなる努力を促したり、ヒントを与えたりすることが肝要である。また協同学習とは、向社会的欲求の影響が強い学習であるが、自分が分かっていることは友達に教え、自分がよく分かっていないことは友達から教えてもらうという教えあい学習の側面ももつ。他者のために学ぶ場合は、自分のために学ぶ場合よりも、深く理解できたり、より優れた解決法が見出されたりする可能性が高い。近年とくに重要視されている学習である。

こうした学習行動は、安心して学べる環境下ではおおむね成功裏に終わるため、学習の結果として知的好奇心に対応した「おもしろい・楽しい」といった感情、有能さへの欲求に対応した自分ではできるといった「有能感」、向社会的欲求に対応したやりがいがあるといった「充実感」を感じることができよう。このような認知・感情は、既述の欲求にフィードバックされ、さらなる動機づけのプロセスが展開される。

幼児期の学習意欲の育て方

モデルに基づき、幼児期の発達を考慮しな

がら、この時期の子どもの自ら学ぶ意欲の育て方について、親の関わりを中心に提案してみよう。

乳児期(2歳前後まで)には親への愛着(心の絆)がほぼ形成され、それが安心して学べる対人的環境の基礎になる。幼児期(2歳前後以降)にはその愛着を確かなものにするとともに、愛着が周囲の人に広がることが大事である。親は子どもに温かく接し、子どもが親からしっかり受容されていると感じられるようにしたい。さらに、親が仲良くしている人(祖父母や幼稚園の先生など)には連鎖的に愛着が形成されるため、親は子どもに関わる大人を中心に良好な関係を形成する必要がある。そうできれば、子どもは周囲の大人に愛着(ないしは愛着よりは弱い信頼感)を形成し、安心して学べる環境はさらに大きく確固としたものになる。

幼児期の発達のな特徴のひとつは知的好奇心が旺盛なことである。この欲求をしっかりと充足させることによって、学ぶこと(この時期には「遊ぶこと」といったほうが適切かもしれない)が「おもしろい・楽しい」という感情の基礎をつくることができる。幼児期の子どもは、いろいろなことに興味関心を示す。これは一般に拡散的好奇心と言われるが、親はこうした好奇心を充足させることが重要である。子どもが赤い夕陽に興味関心を持った場合には、「赤い太陽さん、とってもきれいだね」と、まずは子どもの気持ちに共感し受容したい。そして「(昼間は赤くないけれど)何でいまの太陽さんは赤いの?」と問いかけられたら、子どもの知的レベルを考慮して納得できそうな回答を与えたり(例えば「きつと○○ちゃんに会えなくなるから、悲しくて

泣いているんじゃないのかな』)、一緒に調べてみることを約束したり(例えば「あとで一緒にしらべてみようね」)するのがよいであろう。そうすれば、好奇心を充足させたり、好奇心をさらに刺激したりできる。

さらに、3歳頃からは拡散的好奇心もさることながら、特殊的好奇心が強くなってくる。特殊的好奇心というのは、その子のなかでとくに強い好奇心であって、個性としての好奇心といえる。特殊的好奇心が現れてきたら、親はこの好奇心を充足させること、さらに刺激を与えて豊かな好奇心になるように対応することが必要である。例えば、昆虫に強い好奇心が向けられているような場合は、いろいろな昆虫を観察させてあげたり、さらにはそれらの昆虫がいくつかの仲間に分かれることを気づかせてあげたりするようなことがよいであろう。そのためには、親が前もってお膳立てをすることも必要であり、その意味で親は賢くないといけない。

幼児期には有能さへの欲求に対応する有能感、すなわち自分はよくできるという気持ちの基礎を形成することも大事である。具体的には子どもが成し遂げたこと(お絵かきや工作など)を十分褒めてあげることが大事である。幼児は大切な他者(おもに親)から認めてもらいたいという承認欲求が強いため、何かできると親のもとにやってきて、褒めてもらおうとする。そうしたときには、できたところまで、あるいはよくできたところを褒めてあげたい。

また、幼児は元来「自分は何でもできる」という万能感をもっているといわれる。これは強くたくましい意欲に繋がっている。したがってこれをある程度充足してあげる(ほめ

てあげる)とよいと思う。子どもは成長すると、友達との比較(友達は自分よりも足が速いというようなこと)や大人からのそうした比較情報によって、万能感は等身大の有能感へと変わっていく。それが順調な発達である。

児童期の学習意欲の育て方

児童期の発達的な特徴のひとつは、小学校に入学し、体系的な教育(授業)が始まることである。小学校に入学するという点では、小学校という新しい環境が、子どもにとって安心して学べる環境になることが重要である。そのためには、教師による十分な配慮とともに、親による温かい対応が必要である。帰宅後に学校での出来事をやさしく聞いてあげたり、時間があれば宿題を見てあげたりすることによって小学校への適応を促したい。また、体系的な教育が始まるという点では、自ら学ぶ意欲のプロセスモデルに配置されている「情報」の量が急激に増加することを意味する。まずは授業の内容をしっかりと理解すること、そしてその結果として学ぶことが「おもしろい・楽しい」という感情ならびに有能感を感じるということが重要である。親はそのために、可能な限り宿題の点検をしたり、分からない部分を分かりやすく教えてあげたりすることが肝要であろう。

さらに、児童期には記憶能力が大幅に高まる。それは記憶方略(上手な記憶の仕方)を自発的に使用できるようになるからである。記憶能力は思考の材料を作るためにも重要である。思考の材料が豊かになれば、思考することも楽しくなる。人間は「考える葦」であり、思考能力の発達は記憶能力の発達に支えられている。そして小学生のうちに、考える

ことが本当に「おもしろい・楽しい」という経験を十分に積んでおくことが、その後の創造的な学習にとってとても重要である。

なお、小学校の低・中学年のうちに、毎日ほぼ決まった時間に宿題や復習をする「学習習慣」を形成しておくことが望ましいといわれる。この時期は学校で教えられる内容もそれほど難しくないため、宿題の点検によって翌日の宿題の提出や答えあわせなどでよい結果が得られれば、子どもは有能感を感じ、家庭での学習習慣が定着しやすい。

児童期の2番目の特徴は「優越欲求」が強いということである。有能さへの欲求には、他者よりも優れたという優越欲求と、過去の自分よりもできるようになりたいという「成長欲求」が含まれる。児童期にはこのうちの優越欲求が強くなる。それゆえ、友達と競争して勝てればすごい有能感を感じられるが、負ければ（負けてばかりいれば）無能感を（強く）感じることになるであろう。得意な教科ではこうした欲求を充足することができるが、苦手な教科ではそれは難しい。それゆえ、親として子どもの得意不得意をよく理解し、得意な教科では友達との競争を促しても、不得意な教科では子どもの過去の成績よりもよくなることを目指すような対応のほうが望ましいといえる。

児童期の終わり頃（小学校の高学年頃）には、夢や人生の目標をもてるようになる。夢は実現可能性が低いが、夢の達成に向けてそれなりに自ら学ぶ意欲を形成し、学習を推進できる。他方、人生の目標は夢よりは実現可能性が高く、それゆえに自ら学ぶ意欲を形成し、よりしっかりした学習行動を展開できるといわれる。夢や人生の目標をもつことは、

自ら学ぶ意欲を形成し、そしてより遠い将来に向かって学習を動機づけるという意味で大事である。中学生になれば、人生の目標は自己認識の深まりとともにさらに強い動機づけ要因となる。親としては、子どものモデルになったり、子どもに自分の人生について語って聞かせたり、さらには子どもにとって興味関心が持てそうな伝記を与えたりすることがよいと思う。

〈引用文献〉

- 櫻井茂男 2009 自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア
発達の視点を加えて— 有斐閣
櫻井茂男 2010 自ら学ぶ意欲を育てる 初等教育
資料 6月号 (No.861) 86-91.